

〈図書紹介〉

Thermal Analysis Abstracts 購読のすすめ

ICTA前会長 神戸 博太郎

TAAはICTAの唯一の公式刊行物である、ICTAのPublications Committeeの監修の下に、J. R. RedfernがConsulting Editor、J. H. SharpがEditor-in-Chiefで編集に当たっている。アブストラクトの収集は全世界をいくつかの地域に分けて、それぞれ数名~10名のアブストラクターに依頼しており、アブストラクターが担当する数種の雑誌から原稿を作成し、これを集めて編集し、Key wordを付けて印刷刊行する。わが国では大塚良平教授がアジア地区のRegional Editorとして原稿収集のとりまとめに当たっている。

1972年にVol. 1が刊行され、初めは大型のファイル形式で季刊であったが、1977年のVol. 6より普通の雑誌スタイルで隔月刊となり、印刷もコンパクトで読みやすいものとなった。価格はVol. 7 (1978)で年間U.S. \$115であるが、ICTAの会員には割引きされている。現在わが国よりの購読者の数が少なく、関心もあまりないように思われるが、熱分析の研究者の手で、熱分析の研究者のために編集されているものであるから、ぜひ購読されるよう勧めたい。

〈書 評〉

— Clays and Clay Minerals of Japan —

ed. Toshio Sudo and Susumu Shimoda
講談社サイエンティフィック 1978年10月
16.0×23.5 cm, 326頁, 7,000円

日本はその地質学的環境の特異性から「鉱物の博物館」と言われるぐらい沢山の種類の鉱物を産するが粘土鉱物も例外ではなく、特に熱水性の粘土鉱物、火山灰源の土壌中の粘土鉱物などでは、その研究材料の豊富なこと外国の研究者の垂涎の的となっている。こういった恵まれた条件を背景にして日本の粘土研究は世界的にみてもきわめてすぐれたレベルにある。

編集者の1人、須藤俊男氏(東京教育大学名誉教授)は戦後いち早く粘土鉱物の鉱物学的研究を開始し、数々のすぐれた業績を挙げるとともに多くの後輩を指導し、日本の研究レベルを現在のレベルにまで引き上げた、文字通り日本の粘土鉱物研究の頂点に位置する人である。同氏は今回、その愛弟子の1人である下田 右氏(筑波大学助教授)の協力を得て、編集者として表記の著書を刊行した。同氏らの他、それぞれの分野で代表的な仕事をしている4名の研究者が分担執筆している。

本書は8章からなっていて、次のように構成されている。

- 第1章 日本における粘土および粘土鉱物の概観(須藤俊男)
- 第2章 火山灰および他の火山砕屑物の風化(長沢敬之助)
- 第3章 黒鉱々床の母岩変質(白水晴雄)
- 第4章 アロフェンとイモゴライト(和田光史)

- 第5章 カオリン鉱物(長沢敬之助)
- 第6章 スメクタイト(武司秀夫)
- 第7章 緑泥石鉱物(白水晴雄)
- 第8章 混合層鉱物(下田 右)

カッコ内は分担執筆名。

この中、第1章は須藤氏の著書「粘土鉱物学」(岩波書店、1974)の圧縮版とも言うべきもので粘土鉱物研究に関する凡ゆる問題がきわめて要領良くまとめられている。専門外の方で粘土に興味を持たれる方のご一読をおすすめしたい。第2,3章はいずれも日本独特の研究課題であり、各国の研究者から特に興味を持たれるものと思われる。第4~8章は日本産粘土鉱物の各論とも言うべきもので、成因、鉱物学的データなどが詳細に記述されている。ただ記載の順序、形式などが執筆者によって異なり、この点やや読みにくい気がする。

この著書はいわば現在までの日本における粘土鉱物研究の成果を集大成したものであり、日本の高い研究レベルを窺い知ることができる。この点から言って粘土に関心を持たれる方の座右の書としておすすめしたい。また粘土鉱物の研究にあたっては熱分析が最も有力な研究手段の1つであるが、この著書にはTG曲線、DTA曲線がきわめて豊富に掲載されており、この点から言って本会会員諸氏にも参考になることが多いと思われる。

(大塚良平)